

ク ロ ア チ ア



写真は1989年秋。もう20年近くが経過した。二人はこのようなして遊んだのを覚えているだろうか。

サッカーW杯で日本が属していたグループFにクロアチアが含まれていたが、私はこの国がまだ旧ユーゴスラビア連邦を構成する共和国の一つであった頃訪ねたことがある。放射線防護の国際学会に出席するためであった。

旧ソ連邦の国営航空企業アエロフロートでモスクワに入り、そこで一泊後、乗り換えで旧ユーゴの首都ベオグラードに着いた。アエロフロートを選んだのは安かったのとモスクワで一泊とあったからだ。が、「モスクワ一泊」は市内でなく、飛行場のすぐ近くのホテルだった。残念ながら市内には行けなかった。

旧ユーゴスラビアは、「六つの共和国、五つの民族、四つの言語、三つの宗教、二つの文字、そして一つの国家」といわれるほど多くの民族からなる連邦であったが、私が訪ねた一九八九年十月は、その複雑な連邦国家が崩壊する寸前のぎりぎりの状態にあった。一九八九年十一月、東西冷戦の象徴であったベルリンの壁が崩壊し、一九九一年十二月にはソ連邦そのものが崩壊した。世界の激動期の現場をかいま見た旅であったといえる。

ベオグラードからさらに小さな飛行機に乗り換え、クロアチアの海岸部の都市ドブ

ローニクに向けて飛んだ。機は途中猛烈な雨に遭い、どこか途中の空港に止まってしまった。いつ出発するとも分らない状況であったので、私は学会の参加者とおぼしい方に声を掛けて三人集め、そこから学会が開かれるドブローニクまで、真夜中タクシーを走らせ、バルカン半島の山岳地域の峠をなんどもなんども越えてやっとかの地にたどり着いた。

「アドリア海の真珠」と呼ばれるドブローニクの旧市街地は、かつての防衛上の理由から、高い城壁にすっぽりととり囲まれていて、城壁の上を歩くことが出来た。街の中の軒を接するほどに建てられた赤い屋根の家々と深い碧色のアドリア海とのコントラストがとても美しい。アドリア海の間こうはイタリアである。

宮崎駿の「魔女の宅急便」のモデルとなった都市でないかといわれたことがあったが、そうでないらしい。しかし、あのアニメそっくりの街であった。

石畳と古い建物の美しい街並みとは裏腹に経済は猛烈なインフレ状態にあった。研究者から聞いたことだが、彼らは給料をもらおうとすぐにマルクに交換するのだと言っていた。月の内に自国の通貨であるディナールの貨幣価値が下がるからである。ベオグラ

ドでは小額紙幣が公衆トイレの流しに何枚も流れていた。

会議では三年前に起こったチェルノブイリ事故が取り上げられ、初めて放射能汚染が現実のものとなったと論じられていた。やはりヨーロッパからは広島も長崎も遠いところなのだと感じた。会議終了後、ドブローニクからスロベニアの首都リュブリアナに小さな飛行機で飛び、日本を出る前に連絡を取ってあった研究所で講演をした。チェツクアウトのとき支払いをしようとすると、研究所からいただきますと言われ、うれしかったのを覚えている。その後、列車で半日ほどかけてハンガリーのブダペストに移動。ここでも研究者と交流し、帰国した。

一九九〇年七月から始まったユーゴの内戦でクロアチアもスロベニアも戦場となり、ドブローニクの旧市街地にも多くの砲弾が打ち込まれた。私が訪れた当時、旧市街地の奥まった家の玄関先で遊んでいた幼い姉弟は今どうしているのだろうかと思う。

(二〇〇六年七月十一日)